ビデオ#4: 基調演説と質疑応答 （KEYNOTE ADDRESS AND Q&A）

ブルックス博士: 皆さん、それでは開始させて戴きます。ご紹介させて戴きますゲストスピーカーはバージニア州からの先任上院議員ジム・ウェッブ氏です。バージニアは私の住む州でもあります。しかし、ウェッブ氏は沖縄を熟知されており、また沖縄でもよく知られている方です。沖縄には上院議員として少なくとも 3 回は訪問なさっており、海軍長官でおられたときにも沖縄を訪問、更には海兵隊としても実際にしばらく沖縄に駐在しておられました。したがって、非常に沖縄問題には精通されており、また 2011 年にレビン上院議員との共同報告では、沖縄に関わる再編成計画費用と実現性について大きな疑問を投げかけ、根本的な考え方を一変させました。

ウェッブ上院議員のご経歴を拝読し感心しましたことは、上院議員が軍隊、政府、そして民間の立場で非常に広範囲で豊富な経験をお持ちであるということです。ベトナムでの海兵隊員として、弁護士として、国防省高官、エミー賞受賞のジャーナリストとして、映画制作者並びに 9 冊もの書籍の執筆者として、ウェッブ上院議員はその生涯を通し、アメリカ国家の安全保障上の利益保護、経済均等の促進、米国内の社会的公正、そして政府の説明責任の増大などに献身し続けてこられました。

公職立候補後、2007 年、これらの情熱を持って米国上院に上院議員として就任なされました。ウェッブ上院議員の素晴らしい功績の一つは、公職就任 1 日目にして、9・11 以降、我々の軍隊で奉仕してきた兵士のための包括的な 21 世紀復員兵援護法案を提出されたことです。そして、16 ヶ月後に、その援護法が可決されました。

ウェッブ上院議員の生涯を通じたこれら数々の尽力に加え、上院の軍事委員会、外交委員会、共同経済委員会、そして復員軍人委員会のメンバーとして、軍事や経済外交問題に関し非常に積極的な姿勢で取り組んで来られました。長年に亘る海外での経験、殊にアジアでの経験を持って、現在外交委員会の東アジア・太平洋地域小委員会の委員長を務めていらっしゃいます。加えて、軍事委員会の人事小委員会委員長としても任務にあたっていらっしゃいます。

ウェッブ上院議員は 1975 年にジョージタウン大学で法律の学位を取られました。1987 年には、海軍省史上初の、海軍兵学校出身の兵役経験のある長官となられました。ウェッブ上院議員は再出馬なさらないと聞きました。私自身ウェッブ上院議員に投票したいと思っておりましたので、非常に残念です。しかしながら、同氏には米国の安全保障問題の前線で継続して尽力なさって戴けるものと確信しております。

ウェッブ上院議員、当協議会にお越し戴き有難うございました。心より歓迎しますと共に、議員のメッセージを楽しみにしております。

ウェッブ上院議員: ありがとうございます。本日は、皆様とご一緒させて戴き大変光栄です。私が、当協議会の最後のスピーカーだと思いますが、本日当協議会にご招待戴き、またこうして参加させて戴けたことに対し、仲井眞知事に感謝の気持ちを述べたいと存じます。まず最初に、沖縄で起きました最近の諸事件に対し、心から遺憾の意を表します。私は日本の人々、そして沖縄の人々と長年に亘り繋がりを持って参りました。1969 年、海兵隊としてベトナムへ向かう途中に沖縄に駐在して以来のことです。その後も、ジャーナリストとして、政府の役人として、小説家として、また政府のご招待を受けて沖縄には何度となく再訪しております。私が海軍長官を務めていた頃の素晴らしい瞬間の一つは沖縄にまつわるものです。1853 年、マ

シュー・ペリー提督が最初に沖縄を訪問した際、彼に与えられたか、もしくは彼が持ち帰ったかした護国寺の鐘を沖縄の人々に返還した時です。

沖縄の人々は第二次世界大戦中、非常に苦しい思いをされました。おそらくアメリカ軍が関わった最も悲痛な軍事行動で、そこで一番多くの犠牲者となったのは他でもない沖縄の一般市民でした。にも拘わらず、県民の皆様は米国軍に大変親切で、寛大に対応してくださいました。沖縄がアメリカ合衆国の統治下にあった、1945 年から 1972 年の時代を覚えています。米国軍事計画立案者の間では、沖縄はアメリカの航空母艦と呼ばれていました。ドルが通貨で、私がベトナム戦争中に沖縄を通過していた頃は社会的混乱が充満していた時代でした。沖縄は米軍、海兵隊がベトナムを行き来するための乗り継ぎ地点でした。日本への返還以降、米軍が沖縄に留まったわけですが、沖縄の人々は米軍に対する待遇において大変我慢強く、また非常に好意的な姿勢を取ってこられました。

本日、10 分から 15 分の時間で、世界の当地域におけるアメリカ合衆国の駐留について私個人の見解を述べさせて戴きます。より大きな調和を生み出すために、そして願わくば日本と米国、そして沖縄の人々との関係を維持するという観点から、当地域での米軍駐留が重要な理由、その中での沖縄の位置付け、そして問題解決に向けて対処すべき課題を述べたいと思います。

私が常日頃、上院の同僚たちに口うるさく言っているのは、北東アジアの地図を見ると分かりますが、世界で朝鮮半島だけがロシア、中国、日本の三大国の戦略的・地理的利益が交差する地域である、ということです。これら大国のうちの一つでも、当地域における安定を破って自国の利益を主張し始めると、勢力の交代期にどんなことが起こりうるかというのは、過去百年の歴史が実証した通りです。私達はそれを目撃してきました。率直に申しますと、1930 年代初頭、1931 年に、実際、日本がこれを行いました。第二次世界大戦以降、初の朝鮮冷戦、ソビエト連邦、ロシアが当地域に拡大していくのを見てきました。私がペンタゴンにいた 1980 年代は、ベトナムのカムラン湾に常に 25 隻のソビエト戦闘用艦艇が碇泊しており、ロシア/ソビエト連邦が太平洋に初めて、いわゆる不凍港を持った時代でした。彼らの最大の海軍は太平洋にありました。ソビエトは私達の称する西太平洋でベア偵察機とバックファイア爆撃機を飛行させていました。ソビエト連邦の崩壊以降、中国の台頭に伴って類似した問題に直面してきました。尖閣諸島に関しては、私はこれまで長年に亘って話しもしてきましたし、執筆もしてきました。執筆記事に関しては少なくとも 15 年に及んでいます。2010 年 4 月には重大な出来事が発生しました。最近南シナ海では中国がサンシャという策略的な県を造り、現在、多数の島が存在する 200 万平方キロメートル以上にも及ぶ海域の統治権を主張しています。その広範に及ぶ地域は、マラッカ海峡付近まで延びるもので、地域全体の大きさは日本、フィリピン、ベトナムの陸地を合わせたよりも大きいのです。

何十年もの間これらの勢力が台頭と衰退を繰り返す中で、米国はこういった問題が介在するこの地域に安定をもたらす最大の力となっていると信じています。第二次世界大戦以降、米国は当地域の安定維持においては不可欠かつ、掛替えのない保証人としての役割を果たしてきました。その一部として、日米の安全保障関係、経済関係並びに両国の持つ政治的類似性もまた、当地域の安定性を支えてきた重要な鍵でもあったわけです。米軍基地は当地域の安全保障に向けての重要な要素としての役割を果たしてきました。私達の見解で、そして思いますに日本のほとんどの方々の見解で、この理論を辿っていきますと、沖縄駐留の基地は日米共同安全保障関係の最強たる構成要素として存在してきたのです。尖閣諸島、並びに南シナ海の統治権問題など、ここ 2、3 年の間にこの地域がますます重要になってきたことで、沖縄の基地の重要性が確認されております。また、それに留まらず、私は長年に亘り書き続けてきたことがあります。強硬姿

勢を持って行動しなければ、再三に亘って当地域に非常に深刻な問題を発生させる不均衡が生じ得るということを理解しなければなりません。日本による琉球諸島の統治を中国政府が正式に承認した事実がどこにも見当たらないということを、私はあえて発言してきました。それが、15 年ほど前に私が尖閣諸島について発言し始めた理由の一つでもあります。したがって、米軍駐留によって沖縄県民の皆様が日本の他のどの地域よりも遥かに、しかも 60 年以上もの間、負担を担っているという認識を持ちながら、私達はこれらの全ての課題と利益に直面しているのです。そして、この関係には、利益も存在するものと私は信じています。しかし、そこには代償が伴うということも認識する必要があります。そこで、どうすれば私達のこの関係を維持し続けながら、沖縄県民の福利にも配慮できるかを検討し続けていく必要があります。

日米両政府はこれらの負担を軽減するべく、沖縄県内に基地を移転、及び沖縄県外、グアムのような場所に移転するなどの可能性について、過去 16 年に亘って非常に熱心に取り組んできました。私自身、太平洋地域の軍事計画立案者の一人として勤務したこともありますが、今このように述べるのは信じがたいことですが、1973 年と 1974 年のことです。1974 年に、私が軍事計画立案者としてグアム準州知事に提出した報告書の中で、初めて沖縄の基地を部分的にグアムに移籍することを提案しました。

今日、前半にこの問題が提議されたと聞いています。もう一度申し上げますが、これに関する話し合いは、15 年も行ってきたわけです。沖縄県内への基地の移動について、私が沖縄に関する最初の状況説明を受けたのは、約 15 年前です。この討議を完結させるべき時は今だと私は強く信じています。どのような対策を取るべきか、迅速に、コスト効率がよく、かつ沖縄の人々の要求にも配慮された解決策を見出し、前進する必要があるでしょう。又、沖縄の米軍基地再編と、沖縄からの移転が適切に行われたなら、経済利益を継続して沖縄県民にもたらすものと信じています。日米安全保障関係にも利益をもたらすことでしょうし、東アジアの安定性にも貢献することになります。そして当地域の更なる経済成長と政治的参入を立ち直らせることにもなります。

したがって、ここで私達が理論上検討しなければならない４つの事項を述べさせて戴きます。最初の項目はグアムの基地使用の解決についてで、グアムでなければ、他のいずれかの地域ということになります。私自身は、部分的にグアムに移転する必要があると強く信じています。私が上院に就任以来、この件の実行にあたり私達は懸命に取り組んできました。迅速に事が進捗していない理由の一つには、米国国防省の中に、沖縄もしくはグアムのいずれにせよ、基地移転問題は解決不可能な厄介な難題という見方があるからです。様々な軍事サービスの中で、基地使用がどうあるべきかなど、ペンタゴンには数々の縄張り争いがあります。意思決定に至るまでが非常に難しいのです。それはゲーツ長官の時もそうでしたが、パネッタ長官になってからも状況は同じです。1 つの解決案に対して 20 もの提案事項が提出され、それぞれのシナリオについて沖縄で何が起こるか検討している状態です。グアムに関する別の問題は、環境保護庁が詳細な環境影響評価報告書を要求しているため、このプロセスに時間がかかっているということです。聞くところによると、あと 3 年から 5 年はかかるという話です。このような状況下で、しかもタイミングという点で言えば、規則作成といった種のものは今私達が必要とする事ではありません。環境評価報告書が何故こんなにも長くかかるものなのか解せないですし、アメリカ政府の関係者は、問題が長期化しているために日本や沖縄が受け続けてきたフラストレーションをよく理解すべきだと私は思っています。

第二の事項は、普天間基地問題の解決です。この点については、今日も様々な討議がなされたと思います。私も 2010 に提言を提出しました。レビン上院議員と共にグアム、沖縄、東京を訪れ、その１年後に書類

をまとめました。これはいくつかあるうちの一つの提案です。他に 3 つか、4 つ、あるいはそれ以上の提案があります。迅速に実行に移すことができ、申し上げましたように、沖縄県民にとって一番負担のかからない案を選ぶ必要があります。私には私なりの考えがあり、他にもそれぞれの考えを持った方々がいらっしゃいますが、いずれにしろこの問題を終結させる必要があります。

そして長期的には、米軍の沖縄駐留に関連した地元の犯罪の問題について、沖縄の人々の懸念を尊重し、それを軽減するように、一緒に取り組む必要があると思います。稀な事件ではあっても、その影響は甚大です。米軍として、日本の刑務所に行くとどうなるかということを、もっと具体的に兵士たちに説明することも 1 つの方法でしょう。私は、日本の刑務所制度について刑務所内部からの取材を許された初のアメリカ人ジャーナリストだと言われてきました。その取材は 1983 年から 1984 年に行いました。実際、私が訪問した刑務所の一つは沖縄の刑務所でした。ここではっきり申し上げますが、日本の刑務所には拘置されたくないものです。それを念頭に、行動することです。

似たような話で、先週末、耳にしたばかりの話しですが、米軍の司令官たちが沖縄の軍を封鎖したということです。アメリカ軍兵士全員に外出禁止令を出したのです。11 時以降は自分の基地に留まり、翌朝の 5 時までは出られないというものです。私はむしろ逆ではないかと思います。全く誤った対処法です。私は、米軍兵士と沖縄の人々との間にもっと交流があれば、敬意の度合いもより高まるものと考えるからです。お互いもっと理解し合えるのではないでしょうか。この外壁の反対側には野蛮人がいる、と両者が思っているようではならないのです。それに、沖縄のような所に住み、活動をすることはアメリカ軍兵士にとって非常に素晴らしい機会です。基地から出て現地の文化の歴史と深さをフルに経験できる最も素晴らしい機会なのです。この点を強調するときに思い出すのが ― 今朝も思い出していたのですが ― 私がパレードマガジンから沖縄に派遣され、2001 年に書いた記事です。記事で投げかけた疑問は、我々は沖縄から去るべきかどうか、というものでしたが、11 年前の話です。その折、沖縄に旅し、思想家や学識者、そしてビジネス界のリーダーたちに会い、この関係についてどう思うか、アメリカ人と沖縄県民の交流の仕方についてどう思うかをインタビューする機会がありました。概して、インタビュー内容は非常にポジティブなものでした。当時のアメリカ人に関する調査では、日本人はアメリカ人に対し 70 パーセントがポジティブな見解を示していました。私がインタビューした方の一人が使っていた言葉が、あらかじめ言っておきますが、私はベトナム語は話しますが、日本語は話せませんので、間違えて台無しにしてしまうかもしれませんが、その言葉はチャンプル文化と言うものでした。様々な食材を混ぜて炒める文化という意味です。沖縄の人々は、おそらく日本の他のどの地域よりも、500 年以上にも亘って他の土地から来た人々を快く迎え入れてきた文化の人々だと思います。500 年もの間、中国人との貿易関係を保ってきました。首里城を見て戴いても分かるように、武将時代にも沖縄の人々は中国の武将や、日本の武将を迎え入れており、両者が同時に訪問してきた場合に、両者に敬意を表するため、それぞれ専用の閣を設けていました。これは歓迎する文化です。そして今でも歓迎する文化があると思っています。そして、私は共に問題に対処できることを望んでいます。これらの諸問題を解決しながら、日米間の戦略的な関係においても沖縄の重要性を理解することができ、東アジアおよび東南アジアの安定性にはこの関係がいかに重要であるかを理解できるものと思います。それに向けて、私達には残された課題があることは承知しています。しかし、更に一歩進み、私達の活動の重要性を理解する方法を取りながら問題解決に当たることが必要なのです。

以上、ご質問などがありましたらどうぞ。

聴衆: ウェッブ上院議員、ありがとうございます。ブルッキングスのマイケル・オハンロンです。グアムへの移転において、予算のプレッシャーはどのように関わって来ると思いますか。つまり、移転にはかなりの費用がかかると思いますが、やはりそう思われますか。特にオバマ大統領が再選挙に勝てば、防衛費が現在予定されている通り削減され、予算という一面だけでも、アメリカ側には現在の計画の再検討にかなりのプレッシャーがかかってくるでしょうか。

ウェッブ上院議員: 現在、大きなプレッシャーがあります。前回の予算循環では、見通しの不透明さのため、経費を阻止するためにかなりのプレッシャーがありました。当地域の戦略的妥当性を考えると、沖縄からグアムに移転できるものを無視することは大きな間違いだと思います。実際、40 年前、私がベトナム戦争の終わりに西太平洋地域での基地を調査していたときでした。当地域において、縮小した軍事力で我々の責任を遂行する方法を決定しようとしていたときに、私はグアムとマリアナ諸島に関心を持ったのです。そしてグアムは大きな存在です。543.9 平方キロメートルあり、島の 3 分の1にあたる部分は軍事基地か軍の保有地になっています。それは現在、活用されていません。アプラ港は実際、第二次世界大戦の海軍艦隊の全艦艇を収容できる、広大で、よく整備された港です。グアムの尾根には弾薬庫の地域となっている約 32.4 平方キロメートルの土地があります。アンダーソン空軍基地は現在ほとんど全く活用されておらず、これが私が提案する理由の一つですが、嘉手納にある空軍構成部隊の一部をアンダーソンに移転させるというものです。ベトナム戦争中にアンダーソン空軍基地がフル活用されていた当時を見たことがあります。現在の使用率は、その 25% にも及ばないものと思います。私は、経費的な要件のほとんどは誇張されていると思っています。それから、日本政府が移転にかかる費用を提供すると言っている点も忘れてはなりません。環境影響評価報告書について述べましたが、基地が既にあって環境影響評価報告書を一通り既に済ませた場所で、現在のようにこんなにも長いこと待つ必要があるのか、全く理解できません。したがって、私の見解は、イエスです。予算削減ができる個所を探している者は必ずいるものです。しかし、この問題は既にこんなに時間がかかっているというのに、未だにまだ時間があると思っていることが本当の理由ではないでしょうか。

聴衆: ディスパッチ・ジャパンのピーター・エニスです。オスプレイが普天間基地に配備されました。このように長期化してきた官僚的な行き詰まりを打破する起爆剤のようなものがあるとすれば、それは何だと思われますか。

ウェッブ上院議員: それについては 2 つの答えがあります。まず、沖縄の人々がオスプレイについて大変懸念しているということを読みました。オスプレイは安全な航空機です。交替となるヘリコプターに比べれば静かな航空機です。個人的にも、私の提案でもありますが、もちろん他の多くの提案があるのは知っていますが、嘉手納基地に関する私の最初の提案は空軍のオペレーションの多くを日本の他の基地に分散させ、一部をアンダーソン空軍基地に移転、そして普天間基地のオペレーションを嘉手納基地に移転するというものでした。嘉手納基地には約 24 平方キロメートルの弾薬庫エリアがあります。沖縄に土地を返還する方法を模索しているとしたら、このエリアの規模縮小も検討し得るでしょう。で、まず第一番目は、V-22 の状況ですが、県民の皆さんの間での緊張もいずれはほぐれるでしょうし、そうなるべきだと思っています。普天間基地をどのくらい長く継続すべきかという二番目の質問ですが、少し懸念しています。マイクが質問しておられた予算に関係してくると思います。普天間基地の施設をあと 10 年は延長することになる概算要求について心配しています。そういった概算要求を見たことがありますし、もしそうなれば、普天間基地の閉鎖を早急に決定して他の案件に着手しなければならない状況であるにも拘わらず、普天間基地の施設が半恒久的に存在することにもなりかねないからです。

聴衆： 上院議員、ありがとうございます。私はショーン・タンドンと申しまして、AFP ニュース・エージェンシーの記者です。所謂性的暴行事件に関してですが、まあ半分冗談で仰ったと思うのですが、兵士に日本の刑務所制度のことを話すということを仰っていましたが、このような事件発生を防ぐために、米軍ができることが他にあれば、何だと思いますか？こういった事を防ぐために、何らかの計画はあるのでしょうか、あるいは、何ができるとお思いですか？

ウェッブ上院議員： そうですね。完全に絶対確実というシステムはありません。それに、事件発生数も、述べましたように、私たちの何人かが知っている頃に比べたらかなり減少していると思いますが、しかし、それは言い訳にはなりません。とても優しい人々、そして長い文化の歴史を持った人々に、甚大な影響を及ぼします。今まで、たくさんの対策に当たってきましたし、軍隊としても努力をしてきました。しかし、いくつか明確なことは、この事件に関わった者は、私が読んだところによると、一時的に任務についていた者だったとのことで、どんな形であれ、何が起こったかを私が推測するべきではないと思っています。言えることはただ、非常に残念なことであり、もう二度とこのような事件が発生するべきではないと思っています。

聴衆： ウェッブ上院議員、私はジャパン・リサーチのビクター・オキムと申します。沖縄のピープル・トゥ・ピープル、2 ヶ国又は沖縄とアメリカの関係を向上させ、発展させるプログラムについてどうお考えですか。仰っているのは軍対軍の関係ですか、それとも軍対沖縄県民、もしくはもっと他に興味深い形を提案なさいますか。例えば、商業活動、貿易、教育、文化交流など、現在の状況でどのような局面の促進を提案なさいますか。

ウェッブ上院議員： 今ご自身が提案なさった 3 つ全てを実行するのが健全と言えるでしょう。私が以前に沖縄を訪れたときと今とを比べての見解を申します。沖縄には過去長年にわたって何度となく足を運んでいますが、我々の軍隊のほとんどが日常における人との基本的な交流から閉ざされているということです。実際、数年前に嘉手納空軍基地を案内してもらっているときでした。案内してくれた将校が言うんですね。ここにはシェーキーズ・ピザもあれば、マクドナルドもあると。そして実際、彼はこう言ったんです。嘉手納基地に駐留する我々の兵士は、基地から一歩も出なくても、悠に 3 年過ごせる、と。私はこれを、なんと悲しいことかと残念に思います。いいですか、こんなにも豊かな歴史と、豊かな文化、そしていつ訪れても思うのが素晴らしい島の人々が住む、そんな場所に住んでいながらですよ。基地での生活以上のものがあってよいはずですし、以前はそれがありました。1980 年代の頃、私の親友の一人が沖縄に駐留していましたので、彼の滞在中に 2 度ほど沖縄へ行きました。彼は実際、基地から出て町の中に住んでいました。地元の店で買い物をしたりなど、毎日何らかの交流がありました。それは、極めて健全なことだと思います。これは、私自身の見解で、反対する人もいるかもしれません。しかし、日々の交流があり、向かい合って、人間対人間同士でお互いを理解し合っていくことは、全ての要素において健全なことであり、全ての問題が緩和されていくものと思っています。

聴衆： 私の名前はカネヒラと申します。日本のテレビ東京に勤務しております。まず最初に、数ヶ月前に弊社番組に出演して戴いて、ありがとうございました。あの時は、通信回線が全く使い物にならなかったのですが、完璧に対処して戴きました。又、上院議員のコメントには、日本の視聴者から多数の好意的な反応が寄せられました。私の質問ですが、沖縄県知事は日本政府及び米国に対し、SOFA（日米地位協定）の根本的改正の協議を開始するよう要請しています。米国の指導者達はどうして SOFA の再考察を渋っているのでしょうか。日米間の SOFA はイラクと締結した SOFA と比べると非常に不平等だと言っている日本人の専門家もいます。

ウェッブ上院議員: まず、私の出演に関してのコメントをありがとうございます。SOFA に関して、イラクについてコメントを仰っていましたが、大統領選挙の討論をご覧になった方のためにも、この場ではっきりと申し上げます。ロムニー大統領候補がオバマ大統領に再三くぎを刺しているのが、イラクでは SOFA を成立させていないというものです。この SOFA は国ごとに締結するもので、イラクとの SOFA に関する合意、一切の合意を頓挫させることとなった問題は、イラク政府がイラク駐留アメリカ軍に対する刑事司法権を持ちたがっていたことだと思っています。私が信じるところ、そして公正に見ても、当時はまだ、イラク駐留のアメリカ軍兵士をイラクの刑事司法権に委ねられるまでには、彼らの政府が成熟していませんでした。その問題で意見が分かれてしまいました。日本の政府はそうではありません。日本の刑事司法制度は違います。日本の刑務所には行きたくないものだとは申し上げましたが、日本の制度はもっと公正なものです。ですから、SOFA 再交渉に関しての国防省と日本政府の現状がどうであるかの憶測は、私がすることではないと思います。それについてはどうお答えしたらよいか分かりません。しかし、ご存知のように、アメリカ軍の兵士が米軍基地の外で犯した犯罪で告訴された場合、アメリカ政府が彼らを日本の刑事司法権に委ねることには躊躇しないということは言えます。その点については日本の刑事司法制度を完全に尊重するものです。

聴衆: 私は沖縄出身で現在米国に住むミエコ・マエシロと申します。質問が二つ程あります。報告されていないレイプ事件が実際にはもっと数多くあると聞きましたが、それが本当かどうか知りたいと存じます。もう一つの質問は、グアム移転が実施されなかったのは、グアムの住民が基地拡大に反対していたからだと私は聞いておりますが、この二つの質問について、お願いします。

ウェッブ上院議員: グアムが米軍基地を欲しがっていなかったからということですか。

聴衆: はい。

ウェッブ上院議員: まず最初に、婦女暴行についての質問ですが、これについては私は存じませんが、米軍に回答を求めることは、勿論できると思います。

グアムに関してですが、私の見解ではグアムの住民は軍基地を欲しがっています。これについては、再三討議して参りました。こういった状況下では、必ず現地住民から懸念の声が上がります。米国内でも、基地が特定の地域に置かれる場合、意見が分かれることがあります。私個人の話をさせて戴きます。私の母はイースト・アーカンソーの出身ですが、かなりの僻地で、非常に貧しい環境で育ちました。1970 年代でしたが、私に電話をしてきて、故郷に戻ったわよ、と言うんです。そして、良い知らせは道路が全部舗装されていたことだと言うんです。で、悪い知らせはと言うと、全ての道路の末端にはミサイルがあることだと。つまり、常に交換条件が伴ってくるわけです。しかし、グアムの住民は米国との政治的関係を非常に誇りに思っています。グアムはアメリカの領土で、軍隊には誇りを持って従事しています。ベトナム戦争では 100 人以上のグアム人兵士と海兵隊員が戦場で亡くなっています。つまり、私達は彼らから大きな熱意を受けています。それから、歴史的地域を心配する人々とも討議を重ねています。例えば、銃射撃場を置こうとしていた地域が歴史的に大きな重要性を持っていたということがありましたが、このような種のことですね。しかし、私の見解ではグアムの住民はなぜ（グアムへの米軍移転に）そんなに時間がかかっているのか、と思っているようです。同様に、沖縄では大勢の方々がなぜ（沖縄からの米軍移転に）こんなに時間がかかっているのかと思っています。

ありがとうございました。ご一緒させて戴いて光栄です。

ブルックス博士: まだ、解散ではありません。最後に、上院議員と知事が退場なさる折に皆様に握手をいします。それから、通訳用の器具はご自分のポケットではなくテーブルに置いてお帰り戴けますようお願いします。非常に刺激的な討論が繰り広げられ、私も多くのことを学びました。しかし、この会議が単なる聴講の場で、メモを取り、そして忘れてしまうようなものにしてはならないと思います。行動を起こす機会にするべきです。ここで挙げられた提案やコメント、上院議員のコメントが期待通りの効果を発揮し、この問題を先々に延ばすのではなく、人々に熟考させる良いきっかけになればと思います。これ以上先の日というのはないのです。これは、今現在、対処しなければならない問題です。皆様、どうもありがとうございました。それでは、引き続きお食事の方をお楽しみください。ご来場、真にありがとうございました。